

平成26年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	大口町立大口西小学校	氏名	永田 和久
-----	------------	----	-------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

今回の研修の目的は3つあった。アフリカ、ガーナの地に足をつけること、ガーナの村の人々の暮らしや雰囲気を知ること、そして村の人々がしあわせかどうかを確かめることである。村の人々を対象にしている理由は、日本の生活とは対照的な、電気やガス、水道があまり普及していない人々の価値観に興味を持ったからである。

ガーナの村の人々は、こちらからあいさつすると、とてもうれしそうに返してくれた。手を振ると温かく手を振りかえしてくれた。そして、しあわせかどうかを尋ねると、「しあわせだ」と答えた。笑顔も多く、ゆっくり、つながりを大切にして暮らす様子を感じることができた。

自分の学校に入ってくるアフリカの情報は、募金の際の飢餓の写真だったり、学校に行けない子どもたちの話だったりする。そういった一面もあるが、しあわせに生きているという一面もしっかり伝えて、子どもたちに色々な視点から、アフリカやガーナのことを知って考えて欲しいと思う。

2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

ガーナの人々で印象的だったのは「ゆるさ」である。農村部では、10時に待ち合わせをすると皆10時に出かける準備をするらしい。都心部でも、10時に待ち合わせすると10時~10時59分に来られれば良いという感覚らしい。その日が暮らせられれば良いらしく、毎日仕事でもおしゃべりをしている。農村部では、朝起きて、魚をつつて、お昼ご飯の後は、肉を手に入れる。そして、暗くなったら寝るとい生活スタイルだと聞いた。時間がゆっくりながれるため、ぜいたくな時間の使い方ができるのではないかと思った。

また、ガーナの人々はとてもフレンドリーな一面があった。初対面の人でも声をかければ、笑顔で握手を求めてくるときもあった。時間的なゆとりが気持ちをおおらかにしているのではないかと思った。そんな彼らの格言は「カクラ カクラ」。うまくいかなくても、間違えてもゆっくりゆっくりやっついこうという意味。日本の、早く効率良くとは対照的なおもしろい価値観だと思った。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

日本とガーナのつながりを感じたのは、チョコレートの原材料であるカカオ豆であった。日本のカカオ豆の8割をガーナから輸入していることに驚いた。ガーナのカカオ豆は政府が保護をしていて、「ココボード」という政府の組織が、安定した価格で小規模農家からカカオを購入していることを知った。そして、児童労働はほとんどなく、農家の人々は楽しくカカオ豆作りを行っていることも知った。他国よりもカカオ豆の値段は高いらしいが、安心と品質を重視する日本らしい輸入の選択の仕方だと思った。

一方で、ガーナの人々は、あまりチョコレートを好んで食べることはないらしく、日本のガーナチョコレートも甘すぎると言っていた。そのため、ガーナにとってカカオ豆は、換金作物としての意味合いが大きく、これからますます需要が多くなった時、大規模農法による土地の疲弊や、カカオ豆の低価格化が心配になった。

地球のことも考えた持続可能なつながりを考えていく必要があると思った。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

共通の課題として感じたのは経済発展がもたらす課題である。ガーナの農村部と都心部の暮らしを見て、経済格差やつながりの変化を感じた。

農村部は、収入が天候に左右されやすい現状があった。裸足で生活している人もいれば、学校に行けていない子どももいた。しかし、大勢の人たちが共同で暮らす様子が見られた。ケンケと呼ばれる刺しゅう布は、男性数人が手作業で共同して作っていて楽しそうだった。

一方で、都心部はイオンモールのような店が並び、ほとんど日本と変わらない物価で、薄型テレビ、洋服などが売られていた。しかし、一部の都心部では物ごいや、路上に一人で寝ている人が見られた。工場では、機械化されほとんど人がおらず、従業員はカカオを並べたり、製品のつめこみを行ったりしてひたすら単純作業を行っている様子であった。

発展による課題を踏まえ、持続可能で楽しく暮らせる生活を考えていく必要があると感じた。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

JICAの国際協力事業は、現地の人々が自分たちで生活をより良くできるように支援していると感じた。また、人や環境に配慮した事業もあり本当に嬉しかった。

ガーナでは、マラリアなどの病気により突然元気だった人がいなくなることもあると聞いた。その中で、野口研究所で行っている様々な感染症の研究は、ガーナの人々の命を助けるものであると感じた。そして、研究を日本人だけで行わず、不都合があってもガーナの研究生と一緒に進む姿勢に感銘を受けた。

太陽光パネルプロジェクトの事業でも、数人の日本人が大勢のガーナの人々と仕事をされていて、毎日毎日同じ作業を繰り返し伝えながらも、指示が通らないこともありながらも、粘り強く取り組む姿勢が印象的であった。日本人の、まじめさ誠実さがカッコいいと感じた。

今後は、日本の技術を伝えながら、日本の経済発展によるデメリットも踏まえて、発展を支援できるとガーナの人々にとっても、ガーナに豊富にある自然にとってもいいと思った。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

⑤ 学校訪問 / 青年海外協力隊（小学校教諭）活動

小学生が僕たちを出迎えてくれた時の大合唱が忘れられなかった。120名を超える子どもたちが、大声で歌い、踊っていた。緊張が一気に解けてテンションが上がった。僕たちを踊りの中に出迎えてくれてすごい熱気の中、踊れば踊るほどさらにテンションも上がっていった。言葉も交わしていない中、音楽の持つ力のすご

さを肌で感じる事ができた。

その後、僕たちの出し物をした。ガーナの子供達は、始めの挨拶から、空手の披露、「しあわせなら手をたたこう」の合唱、チェチェコリのダンスと、とても真剣に見ていて、終わった後には大きな拍手を送ってくれた。彼らの温かさを感じる事ができた。そして、遊び、スポーツ、日本文化の3グループに分かれて授業を行った。自分は日本文化の折り紙で紙飛行機を伝えた。子供達が折れるかどうか不安な部分もあったが、比較的上手に作っていたのに驚いた。紙飛行機は好評で、外に出たとき次々に飛ばして遊んでいた。(永田和久)

⑦ セント・ルイス教員養成校／シニア海外ボランティア（理数科教師）活動

シニア海外ボランティアの鈴木光次郎さんから教員養成校のお話を伺い、校舎の中を見学させていただいた。鈴木さんは、学生に理科を教えていた。教員養成校は、学生がお金を受け取って来ることができる。しかし、授業をさぼる学生がいるとのことであった。学生は、中学校から計算機を使って計算してきたこともあり、自力で計算する力がついていないとおっしゃっていた。理科に関しては、教員養成校でも実験機材がそろっていないため、生活の中で手に入るもので工夫をして教えているとのことであった。

日本はしっかりとしたカリキュラムと、学習機材が整っていて、いかに普段恵まれた環境にいるのかを痛感した。一方で、工夫を凝らして実験道具を準備され、活動して見えた鈴木さんの情熱に心を打たれた。今後、恵まれた環境に甘える自分を戒めて、日本の子供達にしっかり向き合いたいと思う事ができた。(永田和久)

⑭ ガーナ由来薬用植物による抗ウイルス及び抗寄生虫活性候補物質の研究プロジェクト

野口記念医学研究所で研究をされている多くの日本人にお会いし、野口英世さんから始まるガーナとの長いつながりを感じるとともに、マラリア、HIV、トリパノソーマ症などの様々な感染症の研究をして見える日本の方々に敬意を抱いた。

しかし、研究を一緒に行うのは現地のガーナ人で、トリパノソーマ症を研究されている鈴木先生は、日本人との感覚の違いに悩まれたと伺った。普段はおおらかなガーナ人であるが、時間を正確に守らなかつたり、夕暮れが近づくとすぐに帰り支度を始めてしまったりするらしく、研究を行っていくうえで、アフリカの気質が裏目にでてしまっていると感じた。日本人と、ガーナ人、お互いの普段のあたりまえを認め合いながら、研究を進めていく大変さと、大切さを学ぶ事ができた。

また、研究をしているガーナ人は、子どものころから研究者にあこがれていて、研究に対して誇りをもって行っていると話していた。彼らの喜びに満ちた顔が忘れられなかった。(永田和久)

⑰ 伊藤忠商事によるカカオ輸出関連の講義

日本でフェアトレードのことを学んでいたこともあり、基本的にカカオ豆の生産には児童労働が存在すると思っていた。しかし、ガーナに関してはココボードという政府の機関があり、農家からカカオ豆を購入する際、安定した価格を設定しているとのことであった。ココボードのおかげで多くの農家はカカオ豆がとれることに

喜びを感じ、楽しく栽培を行っているを知り、衝撃を受け、物事を一方的に見ることへの危機意識を感じた。

一方で、コートジボワールやブルキナファソなど、多くの国がカカオ豆の産業を民営化・プランテーション化していく中、ガーナは国営を守り、小規模農家への安定的な収入を継続していることがうれしかった。これからチョコレートの需要が増えてカカオ豆の生産が追い付かなくなるとのことであったが、ガーナ政府には今のやり方を続けてほしいと思う。同時に、カカオ豆の消費者である自分もチョコレートへの向き合い方をもう一度考える必要があると思った。(永田和久)

● ガーナでの食事全般

ガーナの食事は、主に4種類をローテーションしていると聞いた。フーフー、バンクー、オムツォー、ジョルフライス。基本的に、辛みのあるスープに手を使ってつけて食べるスタイルであった。自分だったら飽きが来そうであるが、ガーナの人々は「すぐにおなか一杯になること」を食事の第一条件であると考えているらしく、種類の多さや味などは二の次であることが分かった。ただ、日本の「きね」と「うす」みたいなもので材料を練ったり、燃料となる木を並べてでっかい鍋で温めたりと、手作り感や出来立ての香りは、日本に勝るのではないかと思った。

また、アポー、カカオ、プランテン、ココナッツなど甘めの果実はいたるところに豊富になっており、ガーナ人は視察途中でも、ちぎりは食べ、ちぎりは食べと、食べ放題の様子であった。私たちもたくさんいただいたのだが、どの果実もさわやかな甘さでとても食べやすく、おかわりを求めるくらいのおいしさであった。

(永田和久)

5. 印象に残る写真2点 とその解説

●写真1…ファイル名 [FRK_2994]

◇キャプション：大合唱！&アフリカンダンス！！

◇解説文：

120人を超える子どもたちが、学校へ訪れた自分たちに大合唱を聞かせてくれた。すさまじい熱気とボリュームでテンションが上がりっぱなしだった。最後に、アフリカンダンスも加わり最高なひと時であった。



●写真2…ファイル名 [HRB_4263]

◇キャプション：とある村の小さな子どもたち

◇解説文：

自分たちはアフリカ ガーナでたくさんのことを学び、刺激を受けた。この村の子どもたちは、僕たちを見て何を感じたのだろうか。大きくなったらどんなことを思うのだろうか。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ・仲間と情報を共有しながら行動していき、自分だけでは気づかない多くのことを学ぶことができた。
- ・色々なことを仲間と語り、様々な生き方も学ぶことができた。
- ・食べ物が合わないこともあるので、日本食をもっていくと安心できると思った。
- ・予定時刻が変わることも多々あるが、時間通りにいかないこともアフリカの魅力としてとらえられるといいと思う。
- ・英語でのコミュニケーションも有効だと思うが、現地の人が使っている言葉であいさつ程度できるととても喜ばれる。チュイ語…おはよう「マーチ」、こんにちは「マーハ」、ありがとう「メダーシ」（メダーシの後にパを加えれば加えるほど、より感謝の意味になる）、さようなら「バイバイ」。
- ・現地に住んでいる日本人から伺ったのですが、日本の虫よけスプレーや蚊取り線香、ベープなどは虫よけ効果があっても、殺虫効果はないとのことであった。そのため、蚊が心配な場合は、枕元にベープをつけて寝るといいと聞いた。

7. その他全般を通じての感想・意見など

ガーナについて、5感を使って多くのことを感じ、学ぶことができた。それ以上に、経験を同じくした研修の仲間と見たもの感じたものを共有できたことで、学びをより深めることができたと思う。

また、日常生活や仕事で感じていること悩んでいることなど、多くのことを仲間と話すことができた。普段人には出しにくいことも、13日間ほとんど生活を共にした仲間だったから言えたこともある。貴重な時間を過ごすことができたと思う。

研修に関しては、同行していただいたファシリテーターに、あらゆる意見をくみ取りながら、柔軟にプログラムを進めていただき、楽しさとともに、同行者としての姿勢を学ぶことができた。

あえて心残りがあるとしたら、お土産を庶民の市場(マーケット)で購入したかったことである。値切ったり、コミュニケーションをとったりしながらの買い物は、日本ではあまりできない経験なので、来年以降取り入れられると参加者はより楽しく学べるのではと思った。

以上